



[ブーケ]

bouquet



長谷川祐子 Yuko Hasegawa

日本の音楽教育を海外へ！ JICA 海外協力隊 隊員が語る

2024年5月から独立行政法人国際協力機構（JICA）海外協力隊の一員としてカンボジアの音楽教育に携わっておられる長谷川祐子先生。挑戦への決断、現地の先生や子どもたちに伝えたいことなど、出発直前の思いをさまざまに語ってくださいました。

聞き手：佐野 靖（東京藝術大学 名誉教授・徳島文理大学 教授）

子どもたちのエネルギーに惹かれて

佐野：長谷川先生は、来月よりJICA海外協力隊の一員としてカンボジアに赴任し、現地で音楽教育に関わる仕事をされるとのことですが、自ら志望されたきっかけは何だったのでしょうか？

長谷川：教員をしている頃からアジアの教育に少し興味があったのですが、その大きなきっかけとなったのが、平成3年に横浜市青年教員海外研修という制度でタイ、インドネシア、シンガポールの3か国の小学校を視察したことです。この制度は、横浜市の若手の先生たちを東南アジアに派遣して、その現地校や日本人学校を10日間にわたって視察するというものだったのですが、その頃はまだ、同じアジアでも日本と比べ、生活環境にも、教育環境にも大きな差があり驚いたことを覚えています。

佐野：地域によって今はものすごく成長を遂げましたよね。

長谷川：そうですね。ただ、そうした当時の環境の中でも、子どもたちの学ぶ姿にエネルギーをものすごく感じたんです。インドネシアの現地校では音楽の授業を拝見しましたが、ひと教室に50人ぐらいの子どもたちがいて、先生が演奏するギターの伴奏に合わせて、生き生きと体を動かしながら現地の歌を歌ってくれました。その歌声は決して整った響きではないのですが、子どもたちの心の中にあるうれしさとか、自分たちの歌を聴いてほしいという気持ちがすごく表れていて、とても感動しました。環境が違って、そうした子どもたちの姿は日本も他の国も一緒ですし、これからの社会を切り

拓いていく子どもたちの姿を垣間見て心打たれましたね。

佐野：そうでしたか。それが30年ぐらい前のことですね。そこから今回のタイミングでの決断に至ったのはどうしてですか？

長谷川：自身の周りの環境や、希望が整ったタイミングがたまたま今だったのです。あのときの海外研修から、アジアとつながりをもちたいという気持ちが大きくなり、日本でインドネシアのガムラン教室に娘たちと一緒に通ったり、現地のガムランフェスティバルに家族で参加させていただいたり、個人的に経験を重ねていきました。でも、こうしたつながりや経験というのは、やはり、やりたいという自分の意思だけではなかなか難しい。自身の置かれている状況も踏まえて、どこでどういう形でアジアとのつながりを深められるかと考えていました。教育委員会を定年退職してから本格的に考え始め、JICAの説明会に行ったり、国際交流基金の活動などを調べたりしていた矢先にコロナ禍になってしまって……。

佐野：コロナがなければもっと早くに行っていたかもしれないですね。カンボジアを選ばれた理由は？

長谷川：いろんな国からさまざまな種類の派遣要請が出されるのですが、私は音楽教育でいきたいと思っていたので、年齢制限がなく、音楽のみを要請しているところをあたらたら、カンボジア一択だったんです。

佐野：ご縁があったんですね。赴任先は小学校ですか？



取材は2024年4月26日、芸術科学研究所にて行われた

長谷川：はい、JICAの職種に小学校教育というのがあり、そこに応募しました。カンボジアでは、シェムリアップ州というアンコールワットがある州の教育青年スポーツ局初等教育課というところに配属になります。

佐野：日本でいうと教育委員会みたいなところですね。教員というよりも、教育課から派遣される一職員という位置付けでしょうか。

長谷川：そうですね。そこが所管しているエリアの幾つかの小学校を巡回して、現地の先生と一緒に音楽の授業をしていくことになります。

現地の実情を踏まえた授業実践に

佐野：カンボジアではどのような学校生活になりますか？

長谷川：具体的なことは現地に行ってみないと分からないことも多く、まずは子どもたちを取り巻く生活環境、教育環境、それから学校をしっかりと確認したいと思っています。楽器がどの程度用意されているのか、そもそも音楽の

教科書というものがあるのかなども向こうで知ることになります。

佐野：そうですね。今回の派遣では、直接子どもたちに指導するというのがメインなのか、それとも現場の先生たちに指導法を助言するのか、ミッションとしてはどのようなになっていますか？

長谷川：一応、学校に巡回指導するということで子どもたちとも直接触れ合えるのですが、役割としては現地の先生たちへの助言が大きいと思います。カンボジアでは、音楽が教科として独立しておらず、芸術科の中に図画工作と音楽が含まれているんです。要するに、今、教えている先生たちが小学生の頃には音楽の授業ってなかったんですね。経験がないからどう教えていいのか分らない、音楽が授業としてきちんとなされていないという現状があるとも聞いています。そのため、先生たちが指導するうえでいろいろな引き出しやアイデアをいっぱいつくってほしいという要請もあります。

佐野：授業では、現地の子どもたちにどうアプ

僕は、これからの日本は
教育を輸出しないとイケない
と思っています。

その環境にあるものを使って、
どうすればより楽しく
授業ができるのかを
考えていきたいですね。

ローチしていきたいとか、先生の中での秘策というか、思い描いている部分はありますか？

長谷川：現地の子どもの実態にもよりますが、比較的とつきやすいリズム遊びなどからアプローチしようかなと考えています。日本の音楽の授業でも、よく導入に手拍子でリズム遊びをしたりまねっこ遊びをしたりしますよね。リズム遊びは、拍にどれくらいいれるかなどの実態を調査するうえでもよいかと思っています。あとは、子どもたちがどんな音楽に親しんで育ってきたのかによって、その音楽観も違ってくる可能性があるのです。西洋音楽的な拍のとり方だけではなく、いろいろな状況に応じてやっていきたいなと思っています。

佐野：いいですね。日本みたいに音楽って科目が独立していないわけだから、ダンスや身体表現などをうまく取り入れて、子どもたちから想像もつかないような反応を引き出せたらおもしろいじゃないですか。日本の音楽の授業で取り組んでいる「音楽の諸要素を教えましょう」と

いうのともまた異なるアプローチができる気がしますね。教材的なものは日本から持っていきますか？

長谷川：はい、日本の教科書を持っていこうと思います。日本の教科書には、音遊びや音楽づくりなどたくさんの素材がそろっているので、活用できたらなと。ただ、日本とカンボジアでは言語や文化、子どもたちの育ちもおそらく違って、それをそのまま使うというのはやはり難しいと思うので、見極めながらやっていくことが大事になるでしょうね。

佐野：今の日本の教科書では、デジタルコンテンツも充実していて、子どもたちが一人一台タブレットを操作しながら、という授業展開も想定されていますよね。そういうのも少し紹介されるとおもしろいかもかもしれませんね。

より楽しく、持続可能な教育を届ける

佐野：僕は、これからの日本は教育を輸出しないとイケないと思っています。日本の文化を

海外に紹介するような演奏イベントもそれはそれでいいんだけど、むしろ指導法とか、特に学校教育の進みたいなことを実は他の国々の人たちは求めているんじゃないかと考えています。今、アジアの一部地域には経済力もあって、有名アーティストなどをアメリカやヨーロッパからでも呼ぶことができる。そういう一部のいわゆる富裕層は、さまざまな音楽に触れる機会がいっぱいあるわけですね。だけど、そうじゃない地域もまだまだあって、日本より環境的に恵まれていない子どもたちもたくさんいるので、そういう所に日本からどんどんアプローチするのはいいと思っています。だからこそ長谷川先生のやろうとしていることはとても重要だと感じています。

長谷川：ありがとうございます。楽器でもなんでも日本と同じように教材や環境を整えば、向こうでもできるというのではなくて、やっぱり

その環境にあるものを使って、どうすればより楽しく授業ができるのかを考えていきたいですね。音楽って楽しいとか、おもしろいな、もっと聴きたい、もっとやってみたくて子どもたちが感じられる、そういうきっかけを2年間で与えられるといいなと思っています。そして、私がいなくなったら授業ができなくなるというのでは困るので、先生たちが継続してできることを残していきたい。道具が必要な場合もあるかもしれないけれど、それに頼らなくてもできることがあると思うので、そういう引き出しを先生たちと一緒に考えながら、私もいろいろな提案をしていきたいです。

佐野：そうですね。やっぱり現地に2年間住むというのはとても貴重な経験になると思いますし、そこから多くのものをもって帰ってきて、また我々に教えてください。本日はお忙しいところありがとうございました。



長谷川 祐子 (はせがわ・ゆうこ)

1956年生まれ。横浜国立大学在学中に1年間ベルリン教育大学に留学。横浜国立大学大学院修了後、横浜市立小学校教員として17年間務める。その間、横浜市一般派遣研究生として東京藝術大学音楽教育研究室に1年間派遣。その後、横浜市教育委員会事務局の指導主事、横浜市立小学校・中学校の管理職を経て、横浜市教育委員会事務局指導部長で定年退職。再任用で横浜市戸塚図書館館長。任期満了後、JICA海外協力隊に応募し、2023年度4次隊として、カンボジアに令和6年5月14日から2年間派遣。



佐野 靖 (さの・やすし)

東京藝術大学名誉教授。1957年徳島県生まれ。東京藝術大学大学院修了(音楽教育専攻)。研究テーマは、音楽科の授業研究・カリキュラム、音楽教員養成、音楽アウトリーチなど。教科書や専門誌の編集にも携わる。『唱歌・童謡の力：歌うこと＝生きること』『文化としての日本のうた』などを刊行し、日本のうたを歌い継ぐ活動も展開。アウトリーチ活動で各地にアーティストを派遣。2023年度まで東京藝術大学副学長。徳島文理大学教授、東京音楽大学特任教授。

今も変わらず、みんなの集える場所を
喫茶店リバティールーム カーナ 岡本美治



「復興応援企画」として、被災地の現在をお伝えする本連載の第6回は、神戸市の喫茶店からお届けします。阪神・淡路大震災での被災経験から公衆電話啓発やまちのボランティア活動に取り組む店主岡本美治さんにお話を伺いました。

被災者を温めた1杯のコーヒー

喫茶店「リバティールーム カーナ」がある神戸市須磨区は、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により甚大な被害を受けました。お店は火災により全焼、まちはがれきの山で埋め尽くされました。そのような状況のもと、店主の岡本美治さんは、がれきの中にパラソルを立て、コーヒーの無料配布を始めます。その1杯は寒空の中、惨事の現場を目の当たりにする人々の心を温めました。

パラソルの横にはベニヤ板で作られた即席の伝言板が設けられ、家族や友人、知人の安否を確認したり伝えたりするための情報ですぐいっぱいになりました。笑顔でコーヒーをふるまう岡本さんのもとには自然と人々が集まっていきました。



店先にある公衆電話。
岡本さんは日常的にこの公衆電話から連絡を取っている



ガレキの中に再開した喫茶店。復旧工事にたずさわる人たちに好評だ
= 1995年2月5日、神戸市須磨区寺田町 (写真・説明 ©神戸新聞社)

震災から3か月後には仮設店舗で喫茶店を再開し、店舗前に公衆電話を設置しました。当時は携帯電話がほとんど普及していなかったため、公衆電話は貴重な連絡手段として多くの人に利用され、また、焼け跡広がる復旧半ばの夜道には、公衆電話スタンドの明かりが街灯や防犯としても役立ちました。携帯電話の普及に伴い多くのお店が公衆電話スタンドを撤去した今でも、岡本さんは公衆電話の大切さを伝えようと保存し、自ら使い続けています。

リバティールーム カーナ
〒654-0025 兵庫県神戸市須磨区寺田町1-2-1
TEL: 078-732-4154
営業時間: 7:30~18:00 第4以外の日曜日は午前中のみ営業
定休日: 第4日曜

子どもたちに安心・安全を

「公衆電話教室」



「公衆電話教室」の様子 ©公益財団法人 日本公衆電話会

岡本さんは公益財団法人 日本公衆電話会の兵庫支部支部長を長年務め、現在は相談役として県内の小学校などを回り、子どもたちに公衆電話の正しい使い方や緊急時の対応について伝え続けています。喫茶店を営む傍ら、自治会や地域の子ども会に参加して得た人脈を生かし学校での「公衆電話教室」を実施したところ、その取り組みが口コミで反響を呼び、多数の学校からオファーがありました。

「公衆電話教室」では、子どもたちが実際に公衆電話を操作し電話をかける練習を行っています。今や携帯電話が当たり前のように手元にあり、いつでもどこでも通話ができる時代ですが、ひとたび災害などで停電が起されれば、通信障害や充電の消耗により使えなくなる危険性もあります。そうした状況を子どもたちなりに理解し、毎回真剣に取り組んでくれていると岡本さんは振り返ります。

Interview つながるボランティアの輪

——ボランティアネットワーク カーナの取り組みを教えてください。

岡本: この喫茶店を使って年に数回、さまざまな企画をしています。関西で活躍されている音楽家や落語家などをお呼びして皆さん楽しんでいただいたり、震災当時からつながりのある方々に当時の経験を語っていただいたりしてきました。たくさんの方に喜んでもらいたいという思いから、当初は飲食代もすべて無料でやっていますが、長く続けていけたらと思っています。

——ボランティアを始められたきっかけはなんですか？

岡本: 震災当時にボランティアで神戸を回っていた方との出会いがきっかけです。みんなで助け合っつながっている場所をということで始めました。「自分のできることなら、人のため、自分のために動きたい」というのが私のモットーでして、コーヒーの無料配布を始めたのもその1つです。この活動のおかげで多くのボランティアの方とも出会い、助けていただきました。仮設店舗を建て

る際には関東の美術大学の学生の皆さんが寄付や手伝いをしてくださって、今ある看板もその時のご縁で作っていただいたものです。



ロゴ看板は、震災当時ボランティアの一員として訪れていた日比野克彦さん(東京藝術大学 学長)によるもの

——震災からまもなく30年ですね。まちの人々と関わってこられて感じることはありますか？

岡本: やっぱり月日の流れを感じます。30年って長いですね。その当時50代としても今80代ですから。高齢化が進む中で、いかにして余生をまちの皆さんとともに暮らそうかというのは、今すごく大きな課題として受け止めています。そうした思いもあって、今年からは「あんしんすこやかセンター(地域包括支援センター)」と協力して認知症カフェ*「こうべオレンジカフェ Meオアシス」を始め、レクリエーションや介護相談ができる場所としてお店を提供しています。

——最後に読者の皆さんへメッセージをお願いします。

岡本: ぜひ「カーナ」のことを覚えていただいて、震災に限らず、昔のことを聞いたり思い出したりしにいらしてください。こうしてさまざまな活動を続けられて幸せですし、多くの方との出会いにいつも感謝しています。私が元気である間はお店を続けたいと思っていますので、いろんな方とおしゃべりができたらうれしいですね。



店主 岡本美治さん
喫茶店は、阪神・淡路大震災、新型コロナウイルス感染症という二度の危機を経営努力により乗り越えとともに、市民に愛され続ける神戸の飲食店を表彰する「神戸名店百選」に選出されている

* 認知症の人やその家族、医療や介護の専門職など、地域の人が気軽に交流できる「集いの場」。認知症の人やその家族同士が情報交換だけでなく、医療や介護の専門職に相談ができる。



第19回

箱根登山電車

小田原駅と強羅駅を結ぶ箱根登山電車。小柄で可愛らしい車体だが、実はとても強いパワーをもった車両。この路線、特殊な装備を用いない通常の鉄道としては日本で最もきつい勾配を走る路線なのだ。

1000m進むと80m登るということを表す80%（パーミル）の急勾配を含めた険しい道のりを、強羅へ向けて登っていく。カーブもきつい所が多く、窓の外を覗くと前の車両の側面がはつきりと見えるほどだ。あまりにきつい勾配のためまっすぐ登ることは出来ず、進行方向を変え、切り返しながらいち進むスイッチバックというのを三度もする。実際に乗ると、この険しい地に線路を通す大変さと、それを維持するということの凄さに感動すると共に、つい拍手を贈りたくなる路線だ。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サクソ国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×（かける）クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

◇上野耕平コンサート情報はこちら。

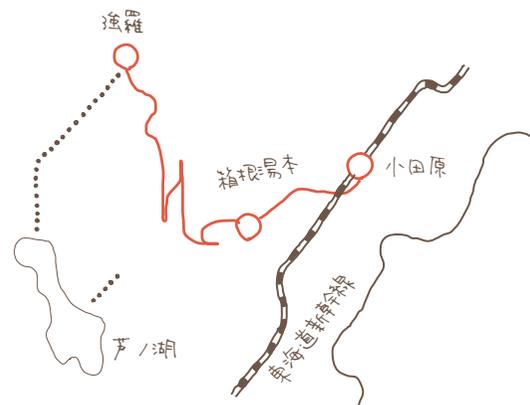
<https://uenokohei.com/concert/>

（上野耕平公式サイトより）



編集部メモ

箱根登山電車の特徴で知られる小田急箱根鉄道線は、スイスのベルニナ鉄道（現：レーティッシュ鉄道ベルニナ線）を参考に建設されている。1979年にスイス政府観光局の協力を得てレーティッシュ鉄道と姉妹鉄道提携を結んだことから、日本有数の本格的な山岳鉄道として紹介されることもある。あじさいの見頃を迎える6月中旬から7月にかけては、「あじさい電車」の愛称でも親しまれている。



次代につなぐ

16

の校長先生 の講話



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第16回では趣向を変えて、元佐賀市立赤松小学校校長の石田正紹先生が、先生向けのお便り「ユメニカケル」でつづられた、教職員に向けた2つのメッセージをお届けします。

石田正紹（いしだ・まさつぐ）
佐賀県こども未来課スーパーバイザー
佐賀県吹奏楽連盟顧問
佐賀県青少年赤十字指導者協議会顧問
元佐賀県小中学校音楽教育研究会会長

第16回 石田正紹 先生（佐賀市立赤松小学校 第38代校長）

共に学校を創る先生（同僚）たちに感謝！

学校は、校長一人では何もできません。

子どもたちの日々の成長を心から支えている先生方（同僚）と手を取り合って、

初めて学校が生きいきとした学び舎になります。

私は、学校づくりの方針や指導のヒントなどを校長通信にしたため、

教職員に発行しました。もちろん全校集会や学校だより等で、

子ども、家庭、地域に伝える内容を事前に共有することにも活用しました。

学校は、子どもを真ん中において、

その時代に関わっている人々全員で創り出していくものと考えます。

そして、伝統を大切に、新たな挑戦を重ねていくことで、

誇りと敬愛の抱かれる学校として、

後世につながっていくものと思います。

私は、その一時代を共に学校づくりに努めた先生方（同僚）へ、

今でも深く感謝しています。

60年続いてきた佐賀市連合音楽会は、コロナ禍で中止となりました。佐賀市の全ての子どもは、人生に一度は大きなステージで友達と思い切り表現するという伝統が途切れてしまったのです。

コロナ禍であっても、子どもたちの大切な思い出や経験のため、教職員で気持ちを一つにして行事等は工夫してきました。おかげさまで、学校独自の大きなホールでの音楽会を開催することも、ご家庭、地域の方々に深くご理解をいただき、お力をお借りしながら実現しました。

できない理由を探すのではなく、できる理由を探そう！

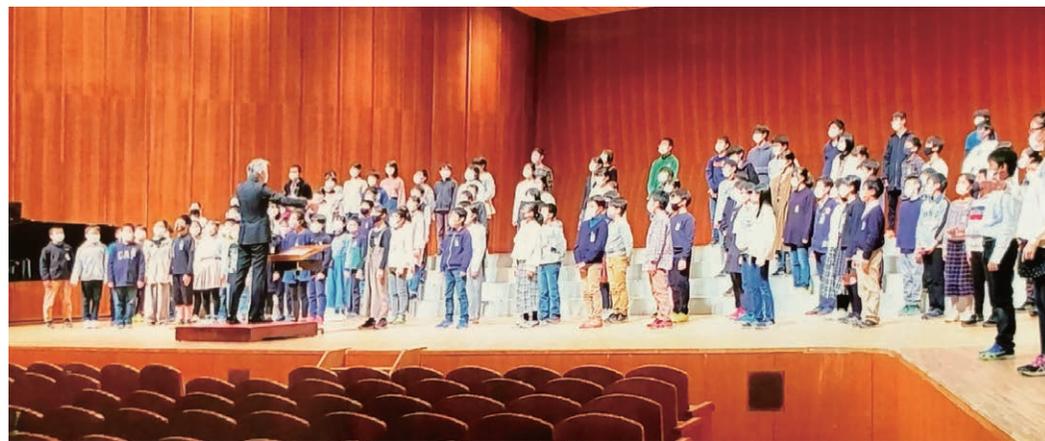
コロナ禍にあって制約を受けながらの学校の教育活動では、学校や教育委員会、教育機関、地域等で行われる多くの教育に係る行事等が軒並み中止や規模縮小を余儀なくされています。

各種の行事にはそれぞれに意義があります。とりわけ学校で行われる行事は、学習したことを総合的に活かして自ら取り組む機会として、まさに節を作りながら大きく柔軟で丈夫になる竹の如く、子どもたちを大きく成長させる「節目」に相当するものです。

行事は、子どもたちを同じ目標に向かわせ、

- ①主体性の発揮と協働の喜び
- ②やり遂げた達成感、感動
- ③自信をもって表現できる
- ④自己有用感
- ⑤思い切って表現したり役割を果たしたりすることで、殻を破って新しい自分を見つけることなどを味わわせることができる素晴らしい教育活動！そしてそれは、授業の成果を有効に繋いでいく生きた学びの場！また、学校生活上のいわば「あそび」にも通ずるものです。

2学期は、修学旅行、運動会、12月の集会などがあります。その実施については、このコロナ禍の中では状況が日々変化することもあり、判断の機会も複数回あると思われます。「できる理由を探して」柔軟な対応で最適解を求めましょう。



児童、教職員の絆な計らいにより、音楽会で指揮をさせていただきました

先生方は、ともすると日頃の忙しさに追われてしまいます。私は校長として働き方改革に傾注してきました。それは、先生方が人生を充実させることで、教育の質を高めることにつながるからです。特に「笑顔は最大の教育環境」といわれるように、先生方の余裕のある自信にあふれた笑顔は、子どもにとって安心、信頼を感じさせるものだと思います。

そこで、働き方改革に併せ、先生方の教育に対するやりがいや情熱などを呼び起こすような声かけに努めてきました。そして、先生方の頑張りが、学校内だけでなく家庭、地域にも伝わるようにしました。日頃の授業等の実践だけではなく、様々な行事で子どもの輝く場をつくるために尽力している姿、楽しみながら子どもたちと触れ合っている先生方の姿を、通信やPTA、コミュニティー、地域の会合等で幅広く伝えました。

先生……だれよりも「先」に「生」きいきとした、子どもたちにとってあこがれの存在！

「どうして教師になったのか？」とたずねられました。みなさん即座に答えられますか？私はしばらく時間がかかりました。初任者の頃の気持ちを思い出してみました。

「いじめのないクラスで、一人ひとりが友達と笑顔で過ごすことができる学級をつくりたい。」

どこにでもあるような言葉ですが、30数年前の私は本気でそう思っていました。なんだかそのときの新鮮な気持ちが思い出されました。それに加えてまだまだ道半ばですが「授業の名人になりたい」とも思っていました。

みなさんどうですか？ノートの片隅に教育者としてのスタート地点にいたときの気持ちを文字にしてみませんか？きっと心の底からじんわりとやる気と情熱が湧いてくることと思います。

子どもたちは「楽しそうだなと感じるもの」に心が動きます。そして、ひきつけられます（大人も一緒ですね）。教師の笑顔だったり、楽しそうにしたりしている姿もその一つです。子どもたちに限らない愛情と情熱をもって「教育を楽しんでいる先生の姿」に子どもたちは大いにひきつけられるものと思います。

先生方、教育を楽しんでいらっしゃいますか？

「先生」とは？

誰よりも「先」に「生」きいきとしたあこがれの存在！

教育信条（教育にかける情熱や大切にしていること等）を子どもに感じさせる教師に！

「教師になったときの思い」を、または教職を積み重ねて今新たに生まれている「教育への思い」や「こんな子どもたちを育てたい！」という熱い思いをもち、子どもたちの「夢」にかけていただけたらと思います。



PTAバンドの演奏で、子どもと教職員でダンスを披露（地域のお祭りにて）

One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

フォトグラファー。日本写真家協会(JPS)、日本舞台写真家協会(JSPS)会員。米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォトを中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
<https://hidaki.weebly.com> Instagram: tomokohidaki_1,2,3

21 枚目 こころの記憶

高野山へ向かう列車「こうや」を降りて、更に山の急斜面を上るケーブルカーへと続く道を歩いていく。ふと右手に顔を向けるとそこには、流れる小川と脇の小道、古い駅舎の奥には赤い橋。その瞬間、この景色がなぜか懐かしいような、この先もずっと忘れられない光景だと確信するような、不思議な感覚を覚えた。

こんなふうには、出会い頭にわけもなく惹かれる風景というの
は、きつと誰しももあるのだろう。
もしも輪廻りんねというものが本当に存在するのであれば、自分
は、遠い昔にこの小川を渡って高野山を目指した多くの人々の
一人なのかもしれない、などと楽しい空想をしながら、急な階段
を弾むように上り、静かにケーブルカーに乗り込んだ。



Contents

- 04 [特別企画/Interview] 長谷川祐子〜日本の音楽教育を海外へ! JICA海外協力隊 隊員が語る
- 08 [連載] 復興応援企画 人とまちと、その先と—— Vol.6
今も変わらず、みんなの集える場所を〜喫茶店リパティールーム カーナ 岡本美治
- 10 [連載] crossing 第19回 上野耕平
- 11 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第16回 石田正紹
- 14 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 21枚目 ヒダキトモコ

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.21をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号の特別企画でご紹介するのは、JICA海外協力隊に参加している長谷川祐子先生です。
アジアの音楽教育に携わりたいという長年の思いを胸に、
カンボジアへ飛び立つ長谷川先生の熱意に満ちた表情が印象的でした。
「復興応援企画 人とまちと、その先と——」では、
阪神・淡路大震災での経験をもとに、
まちの人々がつながる場所づくりに取り組む神戸市の喫茶店をご紹介します。
震災からまもなく30年。これまでの歩みとこれからについて店主の岡本美治さんに伺いました。
『bouquet[ブーケ]』は今号より表紙の装いを新たにしました。
カーテンから広がる風に誘われて、
さまざまなメッセージが読者の皆さまのもとへ届きますように——。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design: 中澤美羽
本文組版: 松田 剛、嵯峨瑞萌(quia)
写真: 川しま ゆうこ(特別企画/Interview)
写真提供: (株)神戸新聞社、(公財)日本公衆電話会
DTP: 清新社 / 印刷: 新日本印刷
製本: ヤマナカ製本

